第六講　傍線部内容説明問題解法　40分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

犬が歩いているとする。私たちはそれをさまざまな仕方で描写しうる。まず、歩いているそれを「犬」という語で表わしてもよいが、その犬種がブルドッグであるならば、「ブルドッグが歩いている」と描写してもよい。あるいは「太りすぎのブルドッグ」と描写するかもしれない。人によっては「かわいい犬」と言うかもしれないし、「こわい犬」と言うかもしれない。また、「歩いている」という描写も、「散歩している」と言ってもよいだろうし、「運動している」と言ってもよい。「なんだかヨタヨタしている」と描写できるかもしれない。もちろんそうした記述をするためには、「犬」「ブルドッグ」「歩く」等々の概念をもっていなければならないが、私たちは自分がもっている概念の中から適当に(1)シュシャ選択して、その概念を用いてものごとをさまざまに描写するのである。

あるものごとを言葉で言い表わすとき、一つのものごとに対してさまざまな言い方が可能となる。そうした、ものごとを描写する表現を「記述」

と呼ぶことにしよう。「犬が歩いている」という文はもちろん記述であるが、「犬」という語も記述であり、「太りすぎのブルドッグ」という句も記述である。「犬」という語を記述と呼ぶのは少し違和感があるようにも思われるが、ここでは語、句、文のいずれの形であれ、あるものごとを描写する言葉をすべて記述と呼ぶことにする。

　(a)<u>一つのものごとはさまざまに記述されうる（記述の多様性）</u>――これが、まず確認しておきたいポイントである。

　目の前のものごとをどう記述するかは、そのものごとに対してどのような関心を、どの程度強くもっているかに依存している。たんに「犬がいる」と記述して満足し、それ以上の関心をまったく示さない場合もあるだろうし、犬がいま何をしているかにも関心を示すならば、「犬が散歩している」と記述するかもしれない。あるいは、それを「ブルドッグ」と記述し、そのブルドッグ特有のヨタヨタした歩き方に注目し、さらにブルドッグにしても太りすぎであると見てとるならば、「太りすぎのブルドッグがヨタヨタ歩いている」と記述するだろう。

　そうした記述は、それに特有の典型的な物語を開く。「犬がいる」であれば、典型的な犬の物語を開くだろう。もちろん、目の前の犬（「ポチ」としよう）には、ポチに固有の物語がある。そこには典型的な犬の物語に

収まらないこともあるだろうし（ポチはよく鼻水を垂らす、ポチは今朝飼い主に怒られた）、典型的な犬の物語に反することもあるかもしれない（ポチはけっして「ワン」とは鳴かず、「アーウ、アーウ」と変な声で鳴く）。だが、「犬がいる」という記述に満足する人は、そうしたディテールには関心をもたない。ただ、目の前のものごとを「犬がいる」と記述し、それが開く典型的な犬の物語の内にそれを位置づけて終わらせるのである。同様に「犬が散歩している」と記述して満足する人は、そこに典型的な犬の散歩の物語（飼い主とともに家を出発して、近所を一周して家に戻る。その時間は数時間以上にわたることはない。犬は散歩を喜び、散歩の間に排泄（はいせつ）をする、等）を開く。

　かくして、記述はそのもとに典型的な物語を開き、目の前のものごとをその物語の内に位置づけることになる。そしてこれが、相貌に反映される。それゆえ、たんに「犬がいる」と記述して満足する人、「犬が散歩している」と記述する人、「太りすぎのブルドッグがヨタヨタ歩いている」と記述する人、それぞれが、その記述に応じた相貌でそれを知覚するのである。

　(b)ただし、どんな記述でも相貌に反映されるというわけではない。たとえば、Aさんが飼っている柴犬とBさんが飼っている柴犬に対して、私は「見た目では区別がつかない」のように言いもする。この場合には、「Aさ

んが飼っている」「Bさんが飼っている」という記述は、私にとってのその二匹の犬の相貌には反映されていないと言える。あるいは、スカイツリーは墨田区押上一丁目にあるが、一丁目だろうが二丁目だろうが、あるいは墨田区ではなく台東区であったとしても、少なくとも私にとってその記述はスカイツリーの相貌には反映されない。では、どのような記述が相貌に反映されるのだろうか。

　記述が相貌に反映される程度は連続的なグラデーションをもっている。大きく相貌を左右する記述もあれば、わずかにしか左右しない記述もあり、まったく相貌に影響を与えない記述もある。どのような記述がより大きく相貌に影響を与えるかについて、私はここで明確な答えを与えることはできない。しかし、知覚の役割がいま現在の主体の行動を導くことにあるのであれば、いま現在の行動に影響を与えるような記述が相貌に大きく影響を与え、将来の行動にのみ関係したり、あるいはほとんど行動の仕方に関係してこない記述の場合には、相貌に与える影響も小さくなると考えられる。それゆえここでは、記述のすべてが相貌に反映されるとまで言うつもりはない。さしあたり、記述は相貌に反映されうることを確認しておきたい。

　実際、私たちのふだんの経験を振り返ってみれば、関心と記述に応じて

知覚される相貌が異なる場面がごくふつうにあることを実感できるのではないだろうか。たとえば駅で駅員を見る。多くの場合、私たちはその人をただ「駅員」としてしか記述しないだろう。そしてそれ以上のディテールには関心をもたない。もちろん、その駅員（山村さんとしよう）には見かけ上の特徴にかぎってみてもさらなる細部が見出される。山村さんは中年男性であり、痩せていて、眼鏡をかけている。だが私は、駅で電車に乗るときにそんなことには関心をもたない。改札を通り、電車に乗ろうとしている私の物語の中で、その人は駅員という役どころだけを与えられている。それゆえ私はその人を、ただ駅員という相貌で見ることになる。もしなんらかのきっかけがあり、その人と親しくなったとする。そのとき、私は彼により強い関心を向けるようになり、私が山村さんを捉える記述もいっそう細かいものとなるだろう。そしてそれに応じて、私にとっての山村さんの相貌も変化するに違いない。

　おまけとして、もう一例、問題の形で出してみよう。あなたは急な坂の上にいてその坂を見下ろしている。そのとき、あなたにはそれが「上り坂」に見えるだろうか、それとも「下り坂」に見えるだろうか。

　あまり考えずに答えるならば、坂の上から見下ろしているのだから、それは下り坂と記述され、下り坂の相貌をもつと答えたくなるだろう。だが、

坂の上から見下ろしているとしても、つまり、眺望点は同じでも、それを上り坂として記述する物語を考えることはできる。あなたはいまその坂を上ってきた。そして振り返り、きつい上り坂だったなと思う。そのとき、あなたには見下ろしているその坂が上り坂に見えているだろう。あるいは、坂の上にいて下からその急坂を上ってくる人を待っているときにも、その坂は上り坂に見えるに違いない。つまり、ある坂が上り坂に見えるか下り坂に見えるかは、どこからその坂を見るかによるのではなく、その坂を上る物語の中にいるか、その坂を下る物語の中にいるかによる。それゆえ、そこを行き交う人も動物もいないのであれば、「上り坂」の風景写真を撮ることは不可能である。「坂」を見上げる写真を撮ることはできる。しかしそれだけではその坂は「上り」とも「下り」とも言えはしない。(c)<u>「上り坂」は物語の中でしか表現できない。</u>

　記述が物語を開き、相貌を生み出すきわめて独特で興味深い事例が、ないということの知覚である。ないものは見えない。それは眺望という意味ではその通りである。知覚の眺望点は対象との位置関係であるから、対象がない場合には眺望点を設定することもできない。それゆえ、存在しない対象の眺望は存在しない。もちろん、「ここからはスカイツリーは見えない」と言うことはできる。しかし、それは「見えない」ことの報告である。

(d)いま問題にしたいのは、「見えない」ということではなく、「ないということが見える」ということである。

　たとえば、よくある手品だが、右手にもったコインを左手に握らせ、右手で左手の上を思わせぶりにさすった後で左手を開くと、コインが消えている。右手も開いて見せるが、右手にもコインはない。このとき私たちはコインの消失を見るのではないだろうか。あるいは、私たちは瓶の中にもうビールが残っていないことを見る。

　これに対して、知覚のレベルで成り立っているのはあくまでも「瓶の中にビールが見えない」ということだけであり、それをもとに「瓶の中にビールがない」と判断するのだと言われるかもしれない。これはおそらく自分の体験を反省してみることでは決着のつかない問題だろう。それゆえ、ある程度、「知覚」をどのレベルで捉えるかという理論的な決断の問題となる。だが私は、ここまで論じてきたように、「知覚」を豊かな内容をもちうるものとして捉えるべきだと考えている。週末の(2)ハンカガイなどで大勢の人たちを見る。私たちは「人」という意味から中立な何ものかを見ているのではなく、まさに「人」を見ている。同様に、私は、そこに「大勢の人たち」を見ているのだと言いたい。多いとか少ないといったこととは中立な何かを見て、その後で付加的に「大勢」と判断するのではなく、私

たちは知覚において(3)タンテキに「大勢」と見てとっている。あるいは、ビールがもう瓶の五分の一ぐらいしかなくなっているとき、私たちはそれを「ビールが残り少ない」という相貌で見るだろう。ならば、空のビール瓶を「ビールがもうない」という相貌で見るのではないだろうか。

ここで、不在の相貌のもとに見られるのは、あくまでもそこにあるものである。つまり、そこに存在しないビールを「ない」という相貌で見るのではなく、テーブルの上にあるそのビール瓶を、ビールが入っていないという意味のもとに見る。あるいは開いた手を、そこにコインがないという意味のもとに見る。そこにあるものが、他のあるものがそこにないという相貌で、見えるのである。

だが、「ないことを見ることができる」と認めたとして、そこにはなお考えねばならないことがある。手品の例を出しておいた。私たちは開いた左手にコインがないことを見て驚く。では、手品でもなんでもない場面で、ただ私が手を開いて見せたとき、あなたはそこにコインがないことを見るだろうか。私たちはコインのことなど話題にしてもいなかった。そして私は、ただ左手を意味もなく開いて見せる。もちろんそこにコインはない。そのような場合には、私たちはそこにコインがないことを見はしないだろう。もし、それでも「左手の上にコインがないことを見ている」と言い張

るのであれば、あなたは他にもいろいろなものがないことをそこに見ることになる。私の左手の上には、饅頭（まんじゅう）もない、(4)カンデンチもない、宝石もない、手乗り文鳥もいない。それら文字通り無数のものたちの不在を見なければならない。

　では、ないことを見るのはどういう場合だろうか。まず、「当然あるはずだ」という予期が裏切られたとき（コイン消失の手品）、あってほしいという願望が満たされないとき（空のビール瓶）といった場合が考えられる。あるいは、「ない」ことに積極的な意味を見出す場合もある。たとえばレンタカーを返すときに車体に傷がないことを確認するといった場合である。いずれにせよ、おおまかに言って、ないことが意味をもつような物語がそこに開かれている。具体的にどのような物語が開かれているかはさまざまであるが、少なくともそれがないことによって物語の展開は大なり小なり影響を受けることになる（ビール瓶が空になった場合、あるいはレンタカーに傷がない場合を考えてみよ）。

　さらに、私はその物語を「生きて」いなければならない。たんなる(5)エソラゴトには相貌を生み出す力はない。相貌は私自身がどのように未来に向かおうとしているかにかかっている。それゆえ、私の手の上に宝石がないという事実は、私がその物語を生きていない以上、知覚に反映されること

はない。

（野矢茂樹『心という難問』による）

問一　傍線部(1)〜(5)を漢字になおしなさい。

問二　傍線部(a)「一つのものごとはさまざまに記述されうる（記述の多様性）」とあるが、どういう意味か、わかりやすく説明しなさい。

問三　傍線部(b)「ただし、どんな記述でも相貌に反映されるというわけではない」とあるが、「記述」が「相貌に反映される」とはどういう意味か、わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部(c)「「上り坂」は物語の中でしか表現できない」とあるが、どういう意味か、わかりやすく説明しなさい。

問五　傍線部(d)「いま問題にしたいのは、「見えない」ということではなく、「ないということが見える」ということである」とあるが、「見えない」と「ないということが見える」との違いを、わかりやすく説明しなさい。

問一

(1)	(5)

(2)

(3)

(4)

問二

問三

問四

問五

第六講　傍線部内容説明問題解法　解答

問一

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
取捨	繁華街	端的	乾電池	絵空事

問二

一つのものごとは、そのものごとに対してどのような関心をどの程度強く持っているかによって、様々な概念の中から取捨選択された概念を用いて、語、句、文のいずれかの形で描写されうるということ。

問三

ものごとに対する記述はそれに特有の典型的な物語を開き、目の前のものごとをその物語の内に位置づけ、主体の現在の行動に関わるか否かにより影響の大小はあるが、その記述の物語に応じた見た目の姿でものごとが知覚されるということ。

問四

ある坂が「上り坂」に見えるためには、坂の上にいるのか下にいるのかという眺望点は関係なく、坂を上るものに対する関心からなされた記述が開く典型的な物語が必要であるということ。

問五

「見えない」とは、対象が存在しておらず眺望点を設定することができないという事態であるのに対し、「ないことが見える」とは、知覚主体が向かおうとしている未来にとって、ないことが意味を持つような物語が開かれている場合に、知覚される事態である。